立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１０年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学研究科　史学専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科・史学専攻・一年	安田　千恵美　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	文学部・教授	荒野　泰典　印	
自然・人文・社会の別	自然　・［人文］・　社会	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名
研究課題名	近世女子用往来物における付載記事の研究		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
研究期間	2010　年度		
研究経費	200　千円		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

近世に出版された女子用往来物のうち、特に教訓型女子用往来と分類される一群の書物を対象とし、それら史料の収集を行い、その内容のうち近世を通じ変化が乏しいとされる「本文」以外の巻頭・頭書・巻末記事（＝付載記事と呼ぶ）にどのようなものがあるのかを調査した。

具体的には、書名と付載記事の相関関係を念頭に置き、教訓型女子用往来の代表的な書である「女大学」と「女今川」の本文の性格の違いが、付載記事に反映されているのかどうかを「「女今川」の再検討―近世的教訓型女子用往来の代表例としての「女今川」」報告により「源氏物語」を事例に検討した。

今後も引き続き付載記事にどのようなものがあったのかという事実解明を行い、研究の基礎作業としたい。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　女子用往来　〕〔　出版　〕〔　付載記事　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

近世に夥しく刊行された女子向けの書の中に、「女訓書（女性用教訓書）」や「女子用往来物」がある。近世女性の「知」を巡る近年の議論のなか、女子用往来が注目されている。本研究では、近世に出版された女子用往来物のうち、特に教訓型女子用往来と分類される一群の書物を対象とし、それら史料の収集を行い、その内容のうち近世を通じ変化が乏しいとされる「本文」以外の巻頭・頭書・巻末記事（＝付載記事と呼ぶ）にどのようなものがあるのかを調査した。

まず史料収集の成果から。東北大学狩野文庫、ノートルダム清心女子大、玉川学園大では多くの史料を撮影し、現在二一九種の女子用往来物の撮影が済んでいる。収集している史料群は教訓型女子用往来のうち、特に「女大学」系統と「女今川」系統の二系統に絞って調査を行った。そのうち、目録整理の終了している一〇八種の女子用往来を横田冬彦氏の行った「「女大学」再考」（脇田晴子他編『ジェンダーの日本史』下、東京大学出版会、一九九五年）の分析手法を基に付載記事の内容分類を行ったところ、以下のような結果が得られた。付載記事をそれぞれ「教訓」、「文芸的教養」、「職業」、「実用」に分けたところ、「女今川」の付載記事は教訓一一％、文芸三四％、職業八％、実用四七％となる。更に実用関連の記事を「生活」、「行事・儀礼」、「占い・信心」、「習い事」に細分化したところ、生活四二％、行事三一％、占い二〇％、習い事七％という結果が得られた。しかし、このような考察では、客観性が担保できないという欠点がある。今後は付載記事の内容とそれぞれの題簽との相関関係の指摘を目指す。

次に上記を踏まえた研究成果であるが、①「「女大学」言説の再検討」と②「女子用往来にみる「源氏物語」受容」の成果を得ることができた。

①では、近世女子用往来としての「女大学」と近代以降に出版された「女大学」の差異を指摘し、「女大学」ばかりが研究上重要視され、当該書のみで一般的近世の「女子教育」が語られてきたことの理由を、「女大学」が近世で最も流布した女訓書であるという説に対して、言説である、と指摘した。

「女大学」言説を新聞史料から追ったところ、近代以降の「女大学」は以下のようになる。福沢諭吉による『女大学評論』･『新女大学』とそれを掲載した「時事新報」の論壇を契機に、近世の女性教育を表象するものとして「女大学」は広く認識され、批判的な眼差しで語られるようになる。明治後期になると一部の論者による福沢の女性論に対する批判が展開され、「女大学」もその主張の中で再評価される。大正期には、「女大学」の評価がそれまでの「旧弊な、古い、近世的」といったものから「日本的で良いもの」というふうに変化し、「女大学」批評や注釈熱が再度高まりを示している一方で、次第に一般の女子には読まれなくなっていっている状況を憂い、明治期の言論を受けて「女大学」教訓の正しさを主として教育者が推進するようになる。昭和初期には浪花節や映画などの多様な形態に派生し、一般大衆にも浸透していく様子がみられる。そして、太平洋戦争を目前にした時期には「日本に一層の栄光を与えるもの」として礼賛されるものとなる。ここにきて近世往来物としての「女大学」とそのイメージとの乖離は極まるのである。その影響で戦後の「女大学」イメージは「戦前のもの」であるという文脈でとらえられるようになる。以上のような「女大学」言説の変遷は、作者といわれた貝原益軒の著した往来物の内容という土台からの乖離の歴史といってもよいように思われるが、そのような言説展開の原初に位置する福沢諭吉の論考において、「女大学」が既に江戸時代の女性を表す代表的なものとされていた意味を問うことが重要であろう。なぜなら近世における出版物としての絶対数の比較では「女大学」でなく「女今川」が近世を代表する女子用往来物と言えるであろう。近世ではこのような関係であった二つの往来物群が明治に入り「女大学今川」と並び称され、やがては「女大学」のみが残っていく。その意味を歴史的に考えていくことが問われて然るべきであろう。

研究成果の概要　つづき

②では、女訓書と呼ばれる書物と「女大学」、「女今川」の三書における「源氏物語」の扱われ方、捉え方に差異があるのか否かという問いから、三書の「源氏物語」の記事を概観した。結論から先に言えば、女訓書の有する源氏を「淫書」とする立場と女子用往来の有する源氏を「益有る本」する立場の違いが確認できた。女子に対する教訓を含むという性格は同じであるが、女訓書と女子用往来には「源氏物語」をめぐって大きく考えを異にしていた。本研究は、近世における「源氏」享受層の性意識という問題意識を有し、女性たちの読書をめぐる「知」の一形態としての「源氏物語」の位置を窺うことを目的としている。

女訓書における「源氏物語」に対する反応は概ね批判的なものであり、その教訓性や教育的妥当性について疑問が提示され、「源氏」は限定的に勧められるものであった。そこでは、「源氏」の有する「好色」性に着目し、分別のつかない女に読ませてもためにはならないため、または胎教のためなどの読み手が女性であるという前提のもとでは、女性は「源氏」を敢えて読まなくてもよい、と近世を通じ繰り返し主張されたことを確認した。では、上記のような思想家や知識人層の人々が認識するところの女訓としての「源氏」像とは全く別に、書肆が編集・制作した女子用往来物において「源氏物語」はどのように扱われているのかと言うと、まず貝原益軒は「女大学」の述作を行ったという体裁になっているのだが、益軒はその著作「女子教法」の中で「源氏物語」を「淫俗の事」として幼い子女に読ませることには反対の姿勢であった。そのような益軒の意向とは異なり、「女大学」を出板した柏原屋清右衛門はあえて女子用往来という販売戦略の一環として頭書記事に「源氏」関係の記事を使用した。大きく異なる両書の「源氏」に対する姿勢は、柏原屋の「源氏」を敢えて忌避するべきものではないとする強い意識が働いてとまでは言えないにしても、書肆独自の編集意図が認められるのである。いずれにせよ往来物という史料からは、女訓という形で思想家によって述べられるものとは異なった「源氏物語」像の存在を窺うことができる。『女大学宝箱』における「源氏」関連記事からはその挿絵をみても「好色」性が認められる。ゆえに、女子用往来の制作者は「好色」性を意図的に忌避しようとしていたとは考えにくいのである。これに比して『教訓躾方　女今川姫小松』などでは、「源氏」の有する「好色」性が和歌を除いて抑えられていた。これは「女今川」の想定読者層が「女大学」に比して低年齢であったことによるのかもしれないが、更なる事例の蓄積が求められる。

研究代表者は、「女大学」と「女今川」の差異、特に「女今川」の有する近世的性格を明らかにすることをテーマとしている。近世における出版数では優位性を保ちながらも、近代に入るとほぼ同時に「女今川」は姿を消した。このことの理由としては、石川松太郎氏によると、守旧の態度に頑迷で女性観の近代化を受け入れなかったためとなっているが、この結論は結果論であり、新たな異種「女今川」が出版されなかった理由は他にあるのではないかと思われるのだ。近代において消えていった女子用往来は余多あるが、消えなかった「女大学」の事例との比較を様々な視点から行い、「女今川」の特徴を明らかにしていきたい。本研究成果によって研究代表者の「女今川」とはどのような書であったのか、という問いの一端を明らかにすることができたと考えている。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①□荒野泰典退職記念論集
「「女大学」言説の再検討」（出版社未定、一六〇〇〇字程度）

③　茜会報告（荒野泰典退職記念論集準備報告）（2010 年 11 月 28 日）
「「女大学」言説の変遷」

③　総合女性史研究会報告（2011 年 2 月 12 日）
「「女今川」の再検討―近世的教訓型女子用往来の代表例としての「女今川」」
①→論文を準備中

以上